

ヴァルス

振り子時計が時を拍つと
誰もいないがらんとした部屋に
透明な人々がふっと現れ、踊りだす

アイン、ツヴァイ、ドライ
アイン、ツヴァイ、ドライ

古き良き時代のヴィーンの
着飾った紳士淑女で満杯の大ホールさながら
楽士も踊るが如くの熱演だ

アイン、ツヴァイ、ドライ
アイン、ツヴァイ、ドライ

目を輝かして見守る僕の前に
素朴なひとりの娘がちょっとひざを曲げ
スカートをつまんでごあいさつ

「踊っていただけますか、そこの御方」

僕らがホールのまん中へ進み出ると
息を切らした人々は僕らを囲んで見守る
さて、ソロ・ヴァイオリンとともにステップ

アイン、ツヴァイ、ドライ
アイン、ツヴァイ、ドライ

遂には周囲から歌が生まれ
合唱が僕らを陶酔へと包み込む
おお、彼女のリードの何と巧みな

思わず僕は尋ねる
「お前の名前を覚えておくれ」
すると彼女は答える
「...春...」

アイン、ツヴァイ、ドライ

アイン、ツヴァイ、ドライ...、ドライ...

ふと見回せば誰もいない部屋
ガラスの外に、灯りに青く映る残雪
その上にひとつの華やかな到来を見た

(1983.4.3)